

藤井シカ先生を憶う

伏見 弘

元気をシカ先生(故藤井鹿三郎教授の愛称)が昨年10月頃より教室に姿を見せなくなって以来淋しいものであった。都電で高田馬場から旧本校舎の早稲田車庫前迄、時々御一緒になって車中話した出会が思い出される。

古い先輩は先生の授業ぶりを忘れることはないであろう。測量実習に際してのゼスチャーなど忘れ得ぬポーズである。

年末に入院されると伺い、御見舞に上った節は、日頃の元気さは全くなく、早く歩行が回復されればと願っていた次第である。正月は自宅でと退院された由であったが、衰弱がひどく、気候の不順をこともあり風邪を引かれたと言われたので悪い予感も感じられた。

1月、2月は老人にはこたえると言われているとあり、遂に2月11日早朝鷺宮の自宅で肉親に見守られながら逝去された。古い卒業生にとっては大学採治の懐しさが一つ減ったように取られるであろう。

昨年は田中教授を3月4日に失い、本年又恩師藤井鹿三郎教授とお別れすることになり、教室一同は全卒業生と共に世の無情を悲しむものである。

此度はシカ先生の思い出を主とし、そのほか若い卒業生の社会活動状態、学内事情レポートなどをまとめて第7号として発刊させて頂きます。最後に日本の資源確保は積極的になりつつある折柄、OBもこれからの若者も一役買って出る機会が多くなることを見通しさせられる資源開発工学の分野として、共に頑張って参りたく存じます。

鹿 園 会

金属工学科 教授 若林章治

藤井鹿三郎先生もついに逝かれた。謹んで哀悼の意を表し、安らかな眠をつづけられることをお祈りする。

藤井先生は学園関係の人なら皆で承知のように早大理工学部発足当時からの方であり、わが採治関係は申すに及ばず、ある時期には電気工学科、建築学科に至るまで、昼夜を問わず教壇に立っておもに測量学を講じ、先生の教えを受けた者は非常な多数に及ぶ。本文に題する処の「鹿園会」はそれら教え子の集りの会……と解せられるかも知れないが、実はそんな大それたものではなく、それを秘かに願った一夜の思いつきに過ぎないことは後述の通りである。

さて私はここに虚名「鹿園会」の題の下に再びお会いすることのできない藤井先生と私との間を述べて、自からを更めて顧みたく思うのである。私は在学時代鉱山測量学について教えを受けたが、2年生の頃から冶金に進む決心がついたので、先生の誠実なご指導に對しては申訳ないが、充分にお応えすることができず、それは専ら同級の元野村鉦業常務のY君に譲った。想い出の多い夜間測量、磐城炭砒の坑内測量実習などでも先生は寛容で、われわれが手を抜く点は先刻お見透してあったが、余程目に余らない限り何も言われなかった。

卒業後も私はしばらく教室にいたが、ある日当時の附属工手学校の採治科主任塩沢先生に呼ばれ、測量の講義をするように申し渡された。聊か困っていると「俵先生だって初め測量の講義をしたんだ」と云われて、別に俵

先生にあやかろうとは思わなかったが、ここでおこがましくも藤井先生の跡をついで工手学校の測量の講義をするようになった。爾來先生とは何か1本の糸で結ばれたように感じ当時先生のおられた赤煉瓦の恩賜館の一室に教をうけにちょいちょい出入りした。後に先生が最新測量学を出版の時に原稿整理のお手伝いをし、時には馳走になったり、歌舞伎座などに連れて行っていただいた。先生の歌舞伎好きは有名で丸橋忠彌堀端の場は講義に登場する処であった。

昭和9年から私は学校を離れ会社勤めをしていたので、16年に再び学校に帰って来るまで、採治会以外ではお会いする機会もなく過ぎた。帰ってからも同じ建物にいなが私は測量とも物探とも縁がなく、戦中、戦後の時期ではあり、ゆっくりお話しする折もなかった。そのうち先生は停年になられ、早稲田大学を一応退かれた。停年後は先生は自由の時間ができるし、私は私で昔をなつかしく想い出す年令になっていた。そんな折何かのキッカケで先生のお弟子の資源科のE先生と3人で一夕を楽しく過した。その後もその味が忘れられず、ご逝去に至るまで3人の会合が定期的に不思議に続き、或る時は深川の伊勢喜でどじょうをご馳走になった上、人形町の末広亭で一夕を過し、江戸情緒を味あわせていたゞいたこともある。それは夏の暑い日だった。

最近では学生ストなどで会合を聞くことなく過したが、それも一段落したので昨年初夏の頃、熱海の早稲田大学の双柿舎に一泊旅行をしようと云うことにE君との間に相談ができた。3人だけでは少し淋しいから電気工学科のK先生に参加を呼びかけ、他に自動車提供者として金属工学科の卒業生のN君に白羽の矢をたてた処、「先生は応用数学を教えて下さった恩師です」と云うことで、これを快諾された。初夏の某日、先生とK君と私は新幹線を熱海で下車、駅前で待っていたN君の車

で、霧が深かったが伊豆スカイラインを一巡の後、双柿舎にくつろいだ。E君は所用のため少し遅れたが、一同先生をかこんで回旧談に花を咲かせた。杯を重ねるに従って調子が出てきて、お世話になった教子が多勢いるのだから、一つ先生を中心とする会をもっと組織的に開こう、そして会の名は先生のお名前の一字をいたゞいて鹿園会にしようと云うことに全員5名であるので纏りも速く、先生の思惑など考える余地なく決定した。早速室の一隅にあった双柿舎の宿泊名簿を持ち出したが、さすがに5名だけでは鹿園会とも名乗り難く、その創立準備会と云う意味で鹿園会幹事会とし、先生以下その姓名と年とを記入した。幹事会はこのようにしてできたが、不都合にもその後鹿園会の設立を心配する者なく、そのままのうちに先生は世を去られた。かくて鹿園会は名称だけを残し、永遠に未完成のうちに終わったのである。

余事ながら翌日は快晴で、E君は所用で早く帰校、あとはN君の車で、折角だから来の宮神社参拝、十国峠から芦の湖スカイライン、湖尻を経て箱根観光ホテルで昼食、ロープウェイで大湧谷駅から乗り、早雲山で再びN君の車の出迎えをうけ、新緑の箱根路を湯本に下った。ここで自動車のN君と別れ、先生とK君と私は小田急ロマンスカーで帰京、新宿駅で5時頃先生とお別れした。これが先生と行を共にした最後で、先生には定めし気に入らぬことも多々あったと思うが、よくわれわれに同調して終始温顔を示して下さったのは如何にも藤井先生らしい処であった。

80有4にしてなくなられた先生にとってはこの世は長い旅路であったろうか、短い旅路であったろうか、知る由もなく。聞く由もない。今はたゞ私は先生の長い教壇生活によって生れた虚名「鹿園会」の潜在メンバーが多数そこはかたなく残されて、活動をつづけていることだけは事実であることを知る。それでよいのだと私は思う。(45.6.1)

藤井先生を偲び

遠藤源助

当学科設立当初から教壇に立たれた藤井先生は、昭和45年2月11日84年のその輝かしい御生涯を閉じられました。それまで先生は御高令にもかかわらず、お元気そのもので、昨秋10月頃までは、隔日ぐらいに大学に見えられ、また理大の講師として元気に教鞭をとっておられました。私共からみますと、もう御無理ではないかと案じられたことも度々ありました。しかし先生にお会するととても83才の御高令とはみえない程の若々しさは外観だけでなく、そのお考えの斬新さには感服させられました。その若さは授業を持つ責任感と、老いてもたゆみない学問への探求心、孫のような若い人達と接触する時を持たれたということだと痛感させられておりました。

そのお元氣な先生が晩秋の或日腰痛のため阿佐ヶ谷の河北病院へ入院されたとの知らせを受け、早速伏見主任と病院を訪れると、先生は病状などを説明され非常にお元氣なのでこの御様子では御回復も遠くはないと安堵しておりました。しかしこの期待も空しく幽明相隔られましたことは本当に残念でなりません。

先生は理工学部が開設されてまもない明治43年1月早稲田大学助教として迎えられ、数学、物理実験などの基礎工学および測量の教育指導をされ、大正13年教授になられてからは鉱山測量等の基礎を固められました。とくに昭和9年発刊された「最近測量学」は測量学をわが国で初めて体系づけた名著として、測量学を学ぶ多くの人に今なお購読されております。先生は物理探鉱学の重要性を早くから見透されて、物理探鉱学会の誕生に大きな力を尽され、自から基礎的な研究に着手し、従来の探鉱法を数理的に解明する研究とその現地測量結果の対比のため、昭和8年北海道の日高地方および足尾鉱山等において探鉱実

験を実施され、わが国の物理探鉱の発展に大きな基礎作りをされました。

その間大学における教育活動に尽された範囲はまことに広く、学部の探鉱冶金科、鉱山科、建築科、電気科などにおいて、測量学、物理探鉱学を中心とした教育指導に停年御退職までの45年の永い歳月にわたり専念された功績は偉大なものであると確信しておりましたところ御逝去もなく従四位勲三等旭日中綬章の叙勲を贈られたことは、その御生涯を教育にささげられた泉下の先生もさだめしお喜びのことと思います。(45.6.7)

事務局より

会員諸氏の御投稿を歓迎します。葉書一枚のお便りを頂けるだけでも幸いです。一枚の葉書が母校と卒業生、先輩と後輩の連帯感を一層強めることとなります。

人手不足におもう

金嶺鉱業・代表取締役 中井 裕

現在の国内銅建値は戦后最高の高水準を維持し、生産高は年産70万トンとこれまた5年前に比べ2倍、そして年率10%以上の伸び率でグングン増えていっております。

その生産高に逆比例して国内の中小鉱山は減少する一方で、昭和30年前後の時代と比較するとその操業数は5分の1以下になっているでしょう。殆んど金属鉱物がそうなのですが、銅に例をとって見ると、大半の鉱源は輸入鉱で、国内鉱は20%にも足りません。従って中小鉱山からの出鉱量など全生産量から見れば九牛の一毛という処、殆んど貢献度はないわけです。

中小鉱山の衰退はその存在価値の低下のため企業側が問題視しなくなった事もありますが、主たる理由は高品位部分の鉱量の涸渇、諸物価の昂騰、そして人手不足にあると思います。数ある小鉱山の開発を手掛けて来た私

が今昔を振り返って見ますと、

昭和30年 鉱山労働者の獲得には事業主
の方で選択の自由がありました。

昭和35年 必要なだけの人手はマアママ
確保できました。

昭和40年 人集めには苦労しましたが、
他産業より若干ペイを高くする事により
何んとか打開できました。

昭和45年 条件をどのようにしようと、
必要なだけの人員(坑内)を確保する事
は絶対に不可能になっております。

そして中小鉱山に限って将来の見通しを私
なりに樹てて見ますと、

昭和50年 若年労働者の補充はきかず、
従来の人達は順次高令化し戦列から引退
して行くばかりで、減る一方という現象
となるでしょう。

昭和55年 ? ? ?

鉱山労働者の平均賃金は、そのおかれてい
る生活環境と作業環境から云えば他産業に比
べ安いような気がします。この春 17% 以上
アップしたからと言って、他産業もアップし
ているから同じです。さりとて2割とか3割
多くペイさえすれば鉱山に人が集るか云え
ば、他産業が繁栄を謳歌している現状と鉱山
の持つ環境の特殊性からいって、減る事はあ
っても増えることは先づないでしょう。

また企業の方でも他産業より3割も5割も
アップしてペイする事は現在ではできないで
しょう。それは鉱山操業の特殊性から云って
鉱石生産費の50% もが人件費で占められて
いるようでは到底望めないことです。この現
実は見方を変えればこの人手不足の世の中で
逆に余っている世界でもあるという皮肉な見
方をする人もあります。が、うかうかすると
大鉱山といえども数年の内に中小鉱山が辿
った道を同じように追いかける運命が待ち構え
ているかも知れません。

これを打開するには高賃金・高能率の操業
しかありません。省力化、更に進めて無人化

への努力こそ必要だと思えます。採掘、運搬、
選鉱と沢山なエネルギーを消費して^{ズリ}珦をつ
くようなことの改革、即ちエネルギーの節約
もまた考えるべきでしょう。

鉱山を愛し、鉱山の研究並びに現場技術に
携る卒業生、在校生の皆さん、これらの一大
改革を強力に推し進めて行って下さい。ここ
20年ばかりの国内鉱山の推移を見てみると、
この調子で進んで行くと、10年、15年后には
人手不足で参ってしまうのではないかと心配
しているのは果して私だけでしょうか。

頑張ってください。頑張りました。

(筆者紹介: 中井裕氏は昭和15年採鉱冶金
学科卒業。故田中教授の後を受けて昭和44
年4月から当学の非常勤講師として開発工学
の講義を担当され、また骨材資源工学会の主
要メンバーとして活動して頂いています。)

漫 筆 二 題

井 上 勇

かって炭鉱の事故防止に水中採炭という夢
を画いたことがある。坑道も切羽も完全に水
づけにして、その中で石炭を切り、流送し、
汲み上げるように機械化したら、爆発も突出
も自然発火もなくなるのではないだろうか。

もちろん、こんな機械の創出には技術的に
解決せねばならぬ多くの課題があることは確
かである。けれど、現代の科学はそれを望め
ば短い期間で実現できる広大な蓄積と強力な
推進力を持っている。資源工学がそれを志向
し、実現に努めれば道は自ずと拓けて来る。

長い将来を考えると、人類に必要な資源を
調達するのに危険を伴う現場に人が立会うこ
とは本来不自然な行動といえる。とくに資源
需給の将来を考える海底や地下深部の開発は
必至であり、そこに人間を送り込んで作業を
させるより、無人作業機の方が低コスト、高
能率になりそうである。こうなると、無人機
械もあながち夢とも言えなくなる。

現代の工業に携り、未来に生きる人々の中

に地表でテレビ画像を見乍ら操作する無線操縦機を開発する人はいませんか？

× × × × ×

私は「自然のものは自然の手に。」という言葉が好きだ。人類が生きるために自然から何かを貰ったら、目的を達した後には再びそっと自然に戻してやる配慮が欲しい。

自然から何ものかを奪い取り、いらぬものを投げ返すような所業は、猿蟹合戦の猿の役割を果しているようなもので、いつか手痛い報いはね返ってくると思わねばならない。

さて、現代は3E革命の時代だという。

Exotic Material, Electronics, Energy Convertor が時代の変革をもたらすという。がそのどれもが原油、新金属、核燃料と云った環境破壊の元凶と目される資源に支えられていることに注目したい。革命が猪突すれば破壊・破滅が待ち受けている。も一つの3Eが形影相伴ってはじめて将来の人類の繁栄が保証される。その3Eは Enforcement, Education, Engineering である。

資源工学が将来の社会の基盤を与えるためには2つの3Eを共に満足させる解を持つことが必要である。それには学ぶ者が最も「自然」に近づく心掛けが欲しい。

米沢治太郎先生の御近況

先生は昭和26年春当大学を御停年で退職されたのちも、御元気で鉱業界のため御尽力され、当学科の催し事などにも積極的に参加され、何かと前向きの御批評を頂いて参りました。本年6月25日には芽でたくも満90才の御誕生日を迎えられました。これよりさき6月17日に軽い脳出血で病床につかれました。最近では御元気を回復されましたが、お年のこととて当分静養されるとのことです。

御住所 東京都中野区鷺宮1-26-7

伊藤新一郎君の荣誉

会員伊藤新一郎君(昭29卒、吉沢石灰工業 大叶鉱山長)は去る4月17日日本鉱業会総会において渡辺賞を受賞された。同賞は「鉱業に関する学術技術の進歩に貢献した者」に与えられる学会最高の賞であり、石灰石鉱業界からは故山田胖氏(元奥多摩工業社長)につぐ2人目の受賞である。受賞の理由は同社の大叶鉱山箕輪鉱山に新たに月産約15万トンの箕輪坑を開坑することに成功した功績にある。同坑は石灰石としては従来の常識を破る坑内掘の鉱山で、所謂トラックレス・マイニング法を採用し、生産、保安等全ての面で完全に機械化、合理化され、能率もわが国石灰石露天掘鉱山の3~5倍に達する近代的鉱山である。石灰石の生産が年間1億トンの大台を越え今後も年率10~20%で増加するといわれる一方、立地条件の良い露天掘鉱量の枯渇が伝えられる今日、同君の今回の成功は石灰石鉱業界が今後進むべき新しい途を開拓したものと高く評価される。(Y.H記)

ドイツでのこと

学部4年 片山 浩二

僕と北岡宗洋君がドイツに行こうと相談し決心したのは44年の1月上旬だった。なぜイギリスやフランスでなくドイツに決めたかといえば、僕達の第二外国語がドイツ語だったこと、西ドイツには他国に比べて外国人のための語学校が整っていると聞いていたからである。

全く何の準備もなしに海外渡航を計画し実行するのは、手続等で骨が折れたことも少なくなかった。3月21日横浜港を出てナトカ経由でモスクワを回り、3月27日ドイツのフランクフルトに無事着いたときは、やっと着いたなあという安堵感と、彼と2人きりになってしまった孤独感とが交錯した。4月1日から10月30まではMünchenから汽車で約

1時間ほど南下した Brannenburg にある Goethe-Institut に在学し、10月から45年3月までは München 大学の聴講生として在学した。その間に感じたことを少し書きたいと思う。

ドイツに限らずヨーロッパ社会では、あらゆる意味での個人主義が徹底していることを感じました。例えば個人的な問題を Goethe の先生に相談していると、親切に説明したり助言を与えてくれたりしますが、最後には必ず Das ist Ihre Sache (それは貴方の問題です)と言います。つまり「実際に断を下すのは貴方自身ですよ」と言うのです。この個人主義は一方では次のようなことも生み出します。北岡君のラジオが故障して修理に出したのですが、1ヶ月以上もたつのに直らなかったので、少し強く「直す気があるのか」と言うと、「文句があるならパスポートを出せ、警察で話をしよう」と言うのです。電気屋の親父の好意に訴えたのですが、全然理解してもらえませんでした。後でその事を知人に話すと、すべての人がそうとは限らず、敗戦後ガムシャラに働いて来た自分を肯定する人は居ることはいるとのことでした。

今1つのことは具体的に聞いたことではありませんが、ドイツ人にはヨーロッパにおいての正統派意識が脈々として流れていると思います。アジアとは彼等にとって未知の世界のまま存在し続けているようです。もちろん日本のソニー、キャノン等を除いての話ですが……。今ドイツの学生間では、ようやく自分達にとってアジアの存在の大きさを理解し考え始めている時期ではないかと思っています。



卒業生からの便り

御恵送の会報にて旧年中の不審悉皆解消。諸先生の御苦勞がよくわかりました……。

現在只今の時点では在学中御指導を受けたのは資源では中野先生、金属では川合、若林両先生だけです。往時茫茫夢の如くですが、世代も変わった今日、それも当然でしょう。

諸先生の御健勝を祈ります。

高岡 橋 清三 (S 16)

◇模型飛行機はその後如何ですか。御健康を祈ります。

会誌拜見致しました。教えて戴いた先生方が次々となくなられるのは寂しい限りです。残られた先生方はどうか何時までもお元気で健闘されん事を祈ります。

運輸省船舶技研 荒井 能 (S 28)

◇先生方は皆元気で。有難度う御座います。

紛争もどうやらおさまり、静かな学園にかえったと思います。皆様元気で!

シエルモールド協会 小林一典 (S 15)

◇御蔭様で一時は静かになりましたが、今や再び学園まさに荒れんとしています。

遙か北海道から資源工学会の発展を御祈りしています。

札幌釧山保安監督局 前田敏郎 (S 28)

◇釧山保安のためお互に頑張りましょう。

年2回(春秋)位会合の機会を持ちたいと思います。殊に地方におりますとそれを強く感じます。

高崎 眼科医 高草木 喬 (T 12)

◇幹事怠慢でなかなか総会を開けないことをおわびします。本年秋には開きます。

経理が火の車だそうで、資源工学会の会費

を増額する様に提案する。

大阪 川岸武司 (S 8)

◇御提案有難度う御座います。会員の会費払込率がもう少し向上すれば、会も苦勞なくやっけて行けそうです。

忙しさにまぎれ会費の払込が遅れて申し訳ありません。懐かしい先生方のお話を伺い嬉しく存じます。藤井先生逝去の由、残念です。資源工学会の発展を祈ります。

横浜市水道局 国井敏雄 (S 21)

◇お便りを頂いて私達も懐かしく当時を思い出します。今後も折にふれてお便りを!

地方鉱山勤務中は学校がむしゅうになつかしかったのに、東京勤務になりはや1年経過した今、御無沙汰ばかりしております。会報第1号の思想を忘れることなく、今後とも活潑な活動を期待しています。

日本セメント 西村脩宏 (S 36)

◇資源工学会も今後ますます発展します。たまには思い出して大学へ顔を見せて下さい。

4月から本社勤務を命ぜられ、先般着任いたしました。10数年ぶりの東京生活で、大都会の活気を肌で感じとりますと、井の中の蛙であった今までの自分が恥かしく感じられてなりません。

昭和鉱業 角田和生 (S 32)

◇東京は雑用が多くて、むやみに忙がしい所ですが、大いに頑張ってください。

御無沙汰しています。海外における資源開発の苦勞話を書けとのことですが、これからまたニューギニアへ行なければなりませんので、今度帰って来たら会誌へ投稿します。それまで悪しからず。

日商岩井技術資源室 百瀬文男 (S 38)

◇元気で行ってらっしゃい。なまなましいレポートを待っています。

45年前半の資源工学教室

昭和44年後半の学生運動も稍平静を保ちある程度まで回復して歳を越した。新年を迎えて普段ならば屠蘇気分の冬休み明であるが、45年正月の授業開始は従来と全く異った気分だった。学生諸君も遅れた勉強時間を取りもどそうとする気構がしばしば見受けられた。それだけ教室の授業も張合のあるものになった。又4年生は卒業の季を迎え、3月一杯まで卒業論文の提出が延期されたものゝ、殆んど休止状態になっていた研究活動を回復することは仲々骨が折れたようである。しかし筆者には矢張大学でも70年の幕明けという感を深くすることが出来た。

1月 5日授業開始、割合平静な学園風景だった。昨年見られた赤字の立看板も見られず、学園としての静回復か。年頭の教室会議では事務室桑原嬢の香港土産で破顔称揚。ソ聯からの研究留学滞在中のオシコフ氏、モスコへ帰国。前途を祈る。資源政策の新局面、海外資源開発の為の特別教育計画について通産省鉱山石炭局鈴木氏協力方を申込まれ、その御意見拝聴。

2月 入学試験の時期到来、従来の経験に照して入試遂行に支障なきよう万善を期す。本年度資源工学科志望学生の成績は非常に良く、優秀な学生が育成されると期待された。この月、誠に残念なことは入院加療後自宅療養中の藤井先生が長逝されたことである。もはやあの温顔、そして厳しい御薫陶に接することが出来ない教室一同の哀惜、こゝに資友会一同、本会誌を藤井先生追悼号とする。慎んで御冥福を祈る。28日理工学部入試、長髪の受験生にも一驚。大過なく終えてほっとする。

3月 1日麻布靈南坂教会で故田中正男教授の1周年記念式。式後故教授宅で教室並びに同級生有志が思い出ばなしの一時を過ぎた。6日卒論メ切。ストの影響で例年より1月おくれとなる。7日入試合格発表・悲喜交々の

掲示板。当科入学生は学院よりの 12 名に早
実推薦者 1 名を加え 総数 74 名を迎える予定。

29 日卒業式、当科卒業生 56 名。従来行な
われた記念会堂での卒業式は中止とされ、各
学科で卒業証書の授与、この平和な時代に非
常体制かと慨嘆。学部長は正装して各学科を
まわり、学生諸君の卒業意識を盛上げられる。
謝恩会は赤坂の都市センターホールで豪華かつ
なごやかな一夕を過ごす。

4 月 物理探鉱学および測量学を担当され
た松尾先生は 3 月 31 日付で大学を退かれ、1
日付で青山学院高等部教諭になられた。5 日
入学式。春季休業期間ほとんどなく学園活動
開始。各教員は学会を控え多事多忙。恒例の
日本鉱業会春季大会は例年理工学部キャン
パスで開催するが、昨年の計画時には 70 年春
の開催は不可能とみて会場を他へ移してしま
った。取こし苦労が過ぎたかも知れない。

5 月 すでに 4 月始めから企業の青田川作
戦で、当科でも各方面で就職内定者がでてい
る。9 日早朝理工学部 4 号館地下の強制捜索
が警察の手で行なわれた。10 日の沖縄デー
に対する事前チェックであった。16 日岩崎先
生が右足首骨折事故、6 月下旬までの休養を
よぎなくされた。23 日新入生歓迎会。例年の
野球、バレーボールなどに変わり多摩湖ハイキ
ング、夜は新大久保駅近くで盛大なコンパ。

3 年生の実習は昨年までと異なり必須科目
となる。鉱山の実習受入れもなかなか厳しい。

6 月 4 日大隈会館で松尾先生の激励会。
青学では地学と物理を担当しているとのこと。
7 日から 17 日まで今井先生は台湾政府の委
嘱により台湾南部地域の地質調査に出張。

12 日安保問題に関してバリストを主張す
る一部学生の学生大会召集。一般学生は余り

関心なく大会は流れたが、今後が思いやられ
る。学園内外次第に騒然として来る。

会 告

資源工学会総会および懇親会を下記の
ように開催する予定です。会員各位の多
数御参加を心からお待しております。

1. 日時 45 年 9 月 19 日 (日)
午後 4 時～6 時
1. 場所 理工学部 1 号館 2 階会議室
1. 会費 一般 ￥1500
学生 ￥500

準備の都合がありますので、あら
かじめ葉書で参加御申込のほどを！

編 集 後 記

第 7 号をお届けします。今回は藤井先生の
思い出の特集号になりましたが、若林先生か
ら頂いた一文は特に惻々たる余韻のある思い
出の記です。御多忙の処を本当に有難度うご
ざいました。

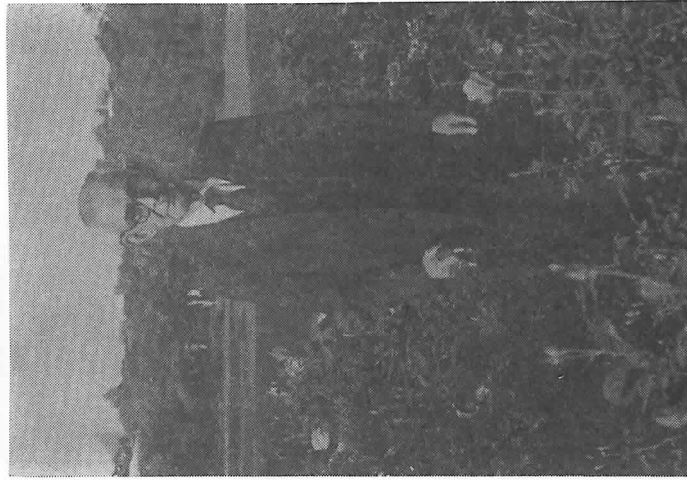
前号で資源工学会の経理の苦しさを訴えま
した処、多数の皆様から早速会費の納入が続
き、事務局としてもほっとしました。しかし
まだ会費の集まりぐあいは約 $\frac{1}{3}$ に過ぎませ
ないので、今後とも宜敷お願い致します。会費
は年額 500 円です。

5 月末に南米ペルーで大地震があり、死者
5 万人以上と報道された。ペリーのリマには
日鉱の岡部潔(昭23)、掛川周男(昭33)の両君
が行っているので心配したが、日鉱本社で大
丈夫とのことで一安心。これからも多くの卒
業生が異境で活躍されることであろうが、元
気で安全第一に頑張ってもらいたい。

東京都新宿区西大久保 4 - 170 電話 (209) 3211
資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 内線(仮) 383
郵便番号 160 振替番号 東京 143534 (非売品)



昭和44年 双柿舎にて
藤井先生の思出



ありし日の米沢先生
大隈庭園にて